

# アジア儒教史における蔡温

## 第40回AAS会議から

<上>



グレイ・J・スミッツ氏

グレイ・J・スミッツ

琉球史に興味を持ち始めたのは、今より七年程前である。当時私はフロリダ大学の歴史専攻の学生であった。特に東アジアの歴史に興味があったので、中国と日本の歴史入門の授業を既に取っていた。ある日、大学の図書館で日本史部門にある沖縄の歴史の本を見て、二、三ページ読み、面白そうだなと思いつつ、その本を借りた。

それはGeorge Kerr氏のOkinawa: The History of an Island Peopleという本で、それ以来、私の琉球史への興味が始まったのである。

琉球史に興味があったといつても、フロリダ大学ではその他日本と中国の思想史にもっと興味があった。また私の日本語能力は十分でなかった。琉球の研究はあまりしなかった。卒業してから日本に

行き、一年間熊本県で仕事をし、その一年間に時々一般の琉球史の本を読んだけれど、帰国してハワイ大学の院生になってから本格的に琉球史の研究を始めた。

以前より儒教を勉強し、理論と実践の問題、つまりどのように理想を理想的でない人間の社会で実行できるかという、どの時代にもどの場所にも存在する問題に関心を抱いていた。これは言うまでもなく、儒教の中の大きな課題である。この興味と琉球史の興味を合わせて儒者であり為政者であった具志頭親方蔡温(一六八二—一七六一)の政治と思想を研究し始めたのである。蔡温については沖縄以外ほとんど知られていないので蔡温の研究はアジアの儒教

# 経済の仕組みを理解

蔡温

## 「独物語」インフレの概念記述

寺で、ある隠者から五カ月程教えを受け、実学の本当の意味を理解した。彼は琉球王国や琉球社会の多様な問題を解決しようと、志を抱きながら一七二〇年に沖縄に帰った。

琉球王国の問題の一つといえは経済的問題があった。琉球王国のいわゆる黄金時代(約一四五〇年から一五五〇年まで)、琉球王国の経済は海外貿易を基盤にしていたが、ヨーロッパと東アジアの諸国の競争によってその貿易の量が減少し、一六〇〇年ころま

では琉球はほとんど農業を基盤とするようになった。資源に乏しい琉球列島が農業に頼るようになった結果、貧困が広がってきたのである。その貧困は百姓だけではなく、士階級にも及んできたのである。何百人何千人も餓死したききんが度々あって、士階級の人々の数が政府関係の仕事より多すぎて、士の多くが失業状態にあった。

さらに不幸なことはいうまでもなく、薩摩の琉球侵略であった。薩摩の支配下になつてから薩摩に対して、年貢を支払わねばならなくなった。琉球政府は行政的な独立を全く失ってしまったのではな

い、多くの面で薩摩に制限された。このため琉球王国内の問題を解決する可能性の範囲が、侵略前よりせばめられた。薩摩の支配による結果がすべて琉球にとって不幸であったかどうか、私には分からない。薩摩は琉球にとって資本の源であったに違いないが、薩摩の琉球投資がどれくらい琉球の利益になったか、

どれくらい薩摩の利益になったか、あるいはどれくらいお互いに利益になったかどうか、という点についてはこれからの私の課題である。しかし、これまでの私の研究から考えると、薩摩の支配は琉球には確かにありがたくない問題であったと思う。

薩摩による悪影響があったにしても時がたつにつれて琉球の生活水準は少し向上し、士階級の中では、わずかながら経済的な余裕が出てきた。十八世紀には文学・劇・詩歌

他の学問の花が咲いた。これは確かに経済的な余裕と関係があるだろうと思う。十八世紀は玉城朝薫・程順則・恩納ナベ・平敷屋朝敏等の時代であった。それ故、多くの歴史書に十八世紀は琉球の第二の黄金時代とある。

経済的な余裕が出てきた理由は何々あるけれども、ここで蔡温による成果について述べたい。まず蔡温は経済のしくみについてよく理解していた。例えば「独物語」に「土産の物は何物にても買手多く龍

在候程大分作出し申事に候買手少く罷居候はば作手も少く罷成候儀決定に候」と書いた。つまり蔡温が当時の言葉で需要供給を明確に述べているのである。彼はインフレという概念をはっきりと分かっていたのである。「独物語」に「御当国の儀は首里那覇泊計専錢を相用得田舎諸島は然々錢を用得申さず候処七八年以来は御国元(御国元は薩摩のこと)より脇方銀子持下り候儀堅く御締方仰付けられ候に付て年々春秋の下船より都合錢四五



AAS会議の登録風景

# アジア儒教史における蔡温

## 第40回 AAS 会議から

グレゴリ・J・スミッツ

この明確な経済学的知識を以て蔡温が様々な経済的改善政策を立てた。「跡々は商人へ税線上納申付都合四五貫目へ程御蔵へ致取納候に付て商売思様に相働罷成らず漸々衰微に及び申さるる儀に候」とい

う状況に対して商人の税金を廃止した。その結果「式拾年以來右之税錢差免思様に相働可く旨申渡に付て商人進立人数も大分に相増手広く商売致し、尤細工勝手之者共色々作出売私候に付て各渡世の營



米国の琉球研究者、左端シエラフイム氏、女性の右側はスミッツ氏

<下>

その仕事を勧めた。蔡温は当時の様々な困難な問題を新しい考えや方法で正面から解決する努力をした。

しかし新しい方法や考えと云えば儒教的でないと思われるかもしれないが蔡温は本当の儒学の実践者であったと思ふ。孔子の儒教は伝統を尊敬しながら且つ創造的でないければならない。仁者は社会や歴史から受け継いだ伝統的な文化に基づいて新しい状況に適切な行動をし、新しい意味を

の思想だけではなく東アジアの長い儒教伝統の中に流れて来たのである。王陽明の知行合一の概念あるいは儒教のいわゆる実学派等がよい例であると思う。

あるいは蔡温もよい例であると思ふ。中国で隠者に出会った時、上述の儒教の不可欠で根本的な思想が初めて理解できたのである。隠者に出会う前に蔡温は沢山のつまらぬ儒者と同じように古典の単語や読み方やお定まりのかたぐ

# 独自に儒教を解釈

## 理想的な過程で実践化

そ商売が盛んになるし、それが社会の利益をもたらすというのである。

上述のような経済政策で蔡温は琉球の経済状態を改善していた。経済がより活発になるにつれて仕事の量が増え、失業中の士階級の人々も士という身分を保ちながら商業・手工業あるいは農業の仕事もすべきであると奨励した。つまり蔡温がまず新しい仕事を

創造する者である。言い換れば社会の状況はいつも変化しているのに新しい対処のし方を創造するのが必要なのである。孔子が故(ふる)きを温めて新しきを知ると言った通り生きていく儒教なら伝統的な文化や古典の精神を本当に理解しているかどうかということが現代の問題に対して適切で効果的な政策を立て、解決していけるかどうかにかかっている。このような考えは孔子

の長い解釈を暗記していたけれども隠者の言葉で言うところには「文字之糟粕」にすぎぬ。それが分かったという事は蔡温の言葉で「糟粕正味之取分け始てこれを承まわり夢之醒の如し」と『自叙伝』に書いた通りである。沖繩に帰ってからは彼はずぐ立派な業績を一つ一つ積み重ねていった。いつも成功でありいつもよい結果であったのではない。しかし蔡温は精一杯改善しようとした。

蔡温の意義は江戸時代の琉球王国の中の最も重要な学者として、為政者であった点である。蔡温の業績は江戸時代の琉球が薩摩支配にもかかわらず、ある程度琉球政府自身が自分の力で琉球社会を改善し、治めていたことである。

蔡温の意義は琉球史だけでなく、東アジアの歴史の中にも注目されるべきである。独特な状況や問題に

その仕事を勧めた。蔡温は当時の様々な困難な問題を新しい考えや方法で正面から解決する努力をした。

しかし新しい方法や考えと云えば儒教的でないと思われるかもしれないが蔡温は本当の儒学の実践者であったと思ふ。孔子の儒教は伝統を尊敬しながら且つ創造的でないければならない。仁者は社会や歴史から受け継いだ伝統的な文化に基づいて新しい状況に適切な行動をし、新しい意味を

の思想だけではなく東アジアの長い儒教伝統の中に流れて来たのである。王陽明の知行合一の概念あるいは儒教のいわゆる実学派等がよい例であると思う。

あるいは蔡温もよい例であると思ふ。中国で隠者に出会った時、上述の儒教の不可欠で根本的な思想が初めて理解できたのである。隠者に出会う前に蔡温は沢山のつまらぬ儒者と同じように古典の単語や読み方やお定まりのかたぐ

蔡温の意義は江戸時代の琉球王国の中の最も重要な学者として、為政者であった点である。蔡温の業績は江戸時代の琉球が薩摩支配にもかかわらず、ある程度琉球政府自身が自分の力で琉球社会を改善し、治めていたことである。

蔡温の意義は琉球史だけでなく、東アジアの歴史の中にも注目されるべきである。独特な状況や問題に

蔡温は独特な思想で政策を推し進めた。彼の思想は他の儒者に似通った面も確かにあるが誰と比較しても相違がある。蔡温は狄生徂徠や伊藤仁斎のように宋時代の理と気や太極等のような概念を拒絶しなかつたが孔子・孟子・荀子のようにそのような抽象的なことを強調はしなかつた。静座や座禅等の自己鍛錬には関心がなかつた。彼は中国の元顔のように実学を勧めたが元顔の反仏教・反書物の態度は取らなかつた。実践的な行動を強調したが王陽明の知(思想)と行(実践)が必ず一つという説に賛成していたかどうかはまだ明らかでない。王陽明の理と心が必ず一つという説に賛成していたかどうかは疑わしい。新井白石と同じ

ように論理的に論じたり書いたりしていたが彼の経済観とは違っていた。要するに蔡温は独自の儒教の解釈をしていったと言える。

蔡温の仕事は儒教の古典の根本的な意味を理解した上で十八世紀琉球の独特な事情に応じて適切な実践的政事政策でその意味を現実化することであった。これはいつの時代の場所においても儒教の理想的な過程であった。それ故蔡温のことは東アジアの儒教伝統の一部を知ることである。十八世紀の琉球の状況や問題と蔡温の解決のし方を研究することで東アジアの儒教伝をも洞察できるのである。

(在ハワイ、高校教師)